

水平線【院長コラム 2026年3月】

【プロフェッショナル】

ひと目見ただけで魚の善し悪しを見分けられる職業人がいる。それを生業にしているから万に一つも間違えることはない。間違えることは長い年月をかけて得た信頼⇨職を失うことにもなりかねないのだ。プロフェッショナルと言う言葉には分野毎に多くの意味合いがあるかもしれないが、共通する土台は職業人生・職業生活ということではないかと思う。

もう 30 年近く前の話で、私が医師として知識も技術もピークだった頃のことだ。若い女性が交通事故で骨折とやけどを負い、その 3 日後にやけどの創面から感染をおこし、生死をさまよう状態となって集中治療室に来た。

「子供は大丈夫でしょうか？」と問うご両親の心配はいかほどか想像に難くないが、その時その子を担当した私は「治療は任せてください。私はプロですから。」と答えたという。そのご両親とは今でも交流があるが、お会いすると必ずこのことを口にされる。すっかりその事を忘れていた私は聞くにつけて若気の至りの発言と、大変に恥ずかしい思いをするばかりだ。

今思うと、それは一歩間違うとそれまで積み重ねてきたものが一瞬で失われてしまう、危険をはらんだ言葉でもあったはずだ。

しかしそれから 30 年近く経った現在も授かっているこの職は、その昔とは仕事の内容や質は大きく変化した。ただ、言葉に出すことはないけれど、今も私は「自分はプロですから」という矜持をもって過ごしているし、これからもそうしてゆきたいと思っている。